

ラボラトリー方式の体験学習における 対面形式とオンライン形式の学習成果の比較

池田 満

(南山大学人文学部心理人間学科)

土屋 耕治

(南山大学人文学部心理人間学科)

1. 問題

ラボラトリー方式の体験学習とは、“今ここ”での人との関わりの体験から、人間や人間関係について学ぶ学習方法（津村，2010，p.173）である。ここでいう“今ここ”での関わりが，他者と直接対面し対話する時間と場を意味することは，特に議論されることもなく，自明のものとして考えられてきた。すなわち，ラボラトリー方式の体験学習は対面で行うことが前提であり，その他の可能性を考慮することもなかったと考えられる。そもそもラボラトリー方式の体験学習が誕生し発展してきた1960年代から1990時代までは，一般の人が対面以外の方法で即時的に他者と対話する方法は電話や無線通信などごく限られたもののしか存在せず，そうした限定的手段における人間関係について，実践的に議論をする必然性自体がなかったともいえる。

21世紀に入り，インターネットが普及する中，電子メールやSNS，さらにはオンライン会議システムなど，複数の人が同時的，即時的にコミュニケーションをする手段は様々に発展してきたものの，ラボラトリー方式の体験学習の文脈では（そして一般社会においても），対面でのコミュニケーションを前提としたうえでの副次的ツール，メディアという位置づけに留まり，対面と同等の手段として使用が試みられることはなかった。

しかし，2020年初頭から始まった新型コロナウイルス感染症の拡大（以降，コロナ禍とする）は，ラボラトリー方式の体験学習にも大きな影響を与えている。感染を予防するためには，多人数で集まる（密集する）ことや間近で会話を（密接する）場面を避けること，他者との十分な距離（2m）を取ること，マスクを着用することなどが求められている。これらの制限は，時間と場

所を共有し共に関わる体験を通して学ぶことを目指すラボラトリー方式の体験学習の実施の大きな障壁となり、実際上、2021年2月現在も従来と同じ方法で体験学習を実施することは困難となっている。

南山大学では、新型コロナウイルスの感染拡大、並びに4月7日に発出された緊急事態宣言を受け、2020年度の授業開始が約3週間遅れの4月24日からとなった。同時に、対面での授業は禁止となり（その後、徐々に緩和）、すべての授業を、Zoomを用いたオンライン形式で実施することとなった。心理人間学科では、ラボラトリー方式の体験学習がカリキュラムの中軸の一つとなっており、一般的な講義形式の授業とは異なる授業方法を、オンラインで実施するという、前例のない試みに取り組むこととなった。

本稿では、2020年度にオンライン形式で実施されたラボラトリー方式の体験学習の授業の一つを取り上げ、授業を通して得られた成果について、従来の対面形式での同授業と数量的に比較する。そのことを通して、ラボラトリー方式の体験学習における、対面実施とオンライン実施の相違など検討する端緒となる示唆を得ることを目指す。

検討対象となる授業の概要

本稿では、南山大学人文学部心理人間学科で開講されている「人間関係概論」を、検討対象とする。この授業は同学科1年生の必修授業として、例年第1クォーター（4月～5月）の8週間に毎週1回、各回2時限（180分）で開講されている（最終週のみ1時限となり、合計で15時限）。しかし2020年度については、オンライン授業化に加えて、上述の通り授業開始日が遅れたため、授業回数として2回減少し、全6回合計12時限で授業が行われた。

この授業のシラバスに記載されている「授業概要」と「到達目標」をTable 1に示す。この授業概要と到達目標は2018年度から変更なく継続されているものである。2020年度については授業期間の短縮、オンライン授業化によって内容の変更を余儀なくされたが、大学の方針としてシラバスは変更せずに授業を行った。

Table 1 人間関係概論の授業概要と到達目標（南山大学Webシラバスより抜粋）

【授業概要】

この授業は演習および講義形式で行われます。人間関係を学ぶ際には、先人が見出した理論から学ぶ方法（心理学や社会学などの学問から学ぶ）と、自らの体験から自分自身の人間関係を学ぶ方法（体験学習）があります。前者は、普遍的な人間関係の原理を整理するために役立つ、後者は自分自身の人間関係の持ち方について、直接的にふりかえり、気づき、自己の成長につなげることが可能となります。この授業では、人間関係に関わる実習演習を授業で実施し、その体験を通して自分自身の他者との関わり方の理解に取り組みます。

【到達目標】

- ・体験から学ぶという学び方が理解できている。
 - ・自分自身のコミュニケーションやグループの中での他者との関わり方の特徴に気づいている。
 - ・行動目標を設定し、それに取り組むことを通して、自己成長に取り組むことができている。
-

授業回ごとの内容詳細（Appendix 1， および 2 を参照）については，2018 年度と2019年度は，時間配分等の小修整に留まりほぼ同じ授業内容で実施された。これに対して2020年度は、「オンライン化」と「授業回数の減少」によって，授業内容に様々な変更が加えられた。主な変更点は以下の通りである。

実習の点で見ると，従来，授業期間中に2回行われていた情報カード型実習（「朝刊にまにあわせろ」「ふくぶく村の宝探し」）は行われなかった。これは，事前にファイルをダウンロードしてもらい，それをもとに情報紙実習を疑似的にオンラインで実施することは可能ではあったものの，主な受講生である1年生は大学の授業がはじめてであり，また，各自の通信環境も明確には分からない状況であったことから，事前の手順が必要ない実習が選択されたためであった。また，従来行われていた「聴く実習」に代わり，「カウンセリング的な聴き方（傾聴）」の実習が行われた。これは，「聴く実習」は，実施のルールが煩雑な面があり，オンラインでは実施に難しさが考えられたこと，また，限られた授業内容のなかでは，カウンセリング的な聴き方や，コーチングといった，しっかりと聴き合うことを体験してもらった方がよいだろうという判断がなされたためであった。実習以外の面では，従来，第2回授業で「コーチング・トリオ」を設定し，最終回までに2～3回，コーチング・セッションを行いお互いの行動目標の達成をサポートする取り組みを行っていたが，2020年度はコーチングを体験する実習を1回のみとした。これは，実習時間が少ないなかでは，より多くの受講生と関わり合う機会を持つことを優先したためであった。その他の特筆事項として，第1クォーター中は学内ネットワーク環境の準備が十分でなかったため，原則として学生の画面がオフとされていた。しかし少人数では画面をオンにしてもよいとされていたため，グループでの実習などの際には画面をオンにすることとした。

ここまで，オンライン化によるネガティブな変更点を挙げてきたが，オンライン化によって新たに実現可能な取り組みもあった。その最大のものは，毎授業のジャーナル・ピックアップの実施であった。ジャーナル・ピックアップとは，毎授業の最後に学生が書いたジャーナル（授業での体験や，気づき，学びなどを書きとめる用紙）の記載内容を教員が読み，特に共有するとよいだろうと思う記述を拾い上げ，資料として提示する取り組みである。従来はジャーナルを手書きで記入し提出を求めていたため，それを読み，拾い上げ，PCに入力して資料を作成するという作業の負担から，授業期間中に2回程度しか実施

することができなかった。しかし、授業の全面オンライン化によってジャーナルもオンライン提出となったため、最大の負担であったPCに入力するという作業がなくなったことから、ジャーナル・ピックアップを毎回行うことができた。

本研究の目的

本稿では、下記の2つの指標について、2018～2020年度の実施年度間の比較を通して、対面実施とオンライン実施の間で生じる際について探索的に検討することを目的とする。¹ 筆者らは、ラボラトリー方式の体験学習のプログラム評価研究として、本授業を対象に、2018年度から継続的に種々のデータを収集している。本稿ではそのうち、数量的データとして収集している、「体験から学ぶ力」と「ソーシャルスキル」を取り上げる。

ラボラトリー方式の体験学習は、道具的な人間関係スキル（ソーシャルスキル）の獲得を目指す学習法ではなく、日常での人間関係場面の中で自らの人間関係を継続的に振り返り発展させる力、いわば人間関係の「学び方を学ぶ」手法（中村，2013）とも呼ばれている。特に本研究で対象としている人間関係概論は、心理人間学科で学ぶラボラトリー方式の体験学習の最初の科目として位置付けられていることから、Table 1の到達目標にも示されているように、「体験から学ぶ学び方」を理解することが主要な目標の一つとなっている。このことから、体験から学ぶ力の獲得が、人間関係概論という教育プログラムのアウトカム指標の一つとして妥当と考えられる。

ラボラトリー方式の体験学習では、EIAHE¹と呼ばれる循環的な学習過程を想定している。これは体験する（Experience）、指摘する（Identify）、分析する（Analyze）、仮説化する（Hypothesize）の頭文字をとったものであり、自らの体験を体験のまま終わらせることなく、関わり行動を内省し、新たな体験場面へ向けた行動計画を立てるサイクルを指している。中村（2004）は、この4つの側面を測定する尺度を作成しており、プログラム評価研究に際しては、この尺度を用いて体験から学ぶ力の獲得について、プログラム効果を測定している。

体験から学ぶ力に加え、プログラム評価研究ではソーシャルスキルを測定している。上述したように、ラボラトリー方式の体験学習は、道具的な対人関係スキルの獲得を目指しているものではない。しかし、これまでの研究ではラボラトリー方式の体験学習を受講した人のソーシャルスキル得点の上昇が確認されている（津村，2002; 2013など）。加えて、ラボラトリー方式の体験学習の

¹ 「対面授業」と「オンライン授業」の比較を目的とするならば、2018年度と2019年度のデータを統合し、2020年度と比較するのが妥当とも考えられる。しかし、2018年度と2019年度についても完全に同一内容ではないことから、本稿では統合はせず、年度ごとに比較することとした。

プログラム評価におけるロジックモデルとしても、アウトカムとしての体験から学ぶ力の獲得することで、自らの日々の体験から人間関係をふりかえる力の向上が見込まれることから、ソーシャルスキルはインパクトとして位置付けることが可能である。そのため、プログラム評価研究においてもソーシャルスキルを指標の一つとして測定している。

2018、2019年度と2020年度の違いは、それまで教室で対面コミュニケーションによって進めていたものがオンライン化されたというコミュニケーション・メディアの変化だけにとどまらず、期間の短縮や技術的限界から授業内容にも変化が生じている。加えて、授業外での学生同士の交流ができないことなど、学生を取り巻く環境が全く異なる中で行われた授業であり、本稿で2018～2020年度の比較を通してなんらかの差異が見出されたとしても、その原因をオンライン化のみに帰結させることはできない。しかし、これまで経験のなかったオンラインでのラボラトリー方式の体験学習の実施によって生じた変化を見ることで、オンライン実施の欠点や利点をより精査するうえでの、端緒となることが期待できると考える。

2. 方法

調査対象者と調査方法

2018～2020年度に人間関係概論を受講した学生を対象に、匿名自己回答式の質問紙調査を実施した。回答の際、事前事後調査の照合のため、任意で携帯電話番号の下4桁の記入を求めた。2018年度と2019年度については紙媒体で調査を行い、2020年度についてはSurvey Monkeyを用いたオンライン調査を行った。各年度、初回授業終了時に事前調査、最終授業終了時に事後調査を実施する、一群事前事後テストデザインを採用した。研究では、事前事後、両方に回答があったものを分析の対象とした。分析対象者の性別と学年、学科構成をTable 2に示す。心理人間学科以外の学生、2年次以上の学生の割合が低かったため、本研究では区別せず分析の対象とした。

Table 2 各調査年度の分析対象者の構成

年度	性別		学年		学科	
	男	女	1年生	2年生以上	心理人間学科	他学科
2018	72	15	76	11	83	4
2019	71	17	83	5	84	4
2020	27	3	30	0	30	0

調査項目

回答者の性別や所属学科等のデモグラフィック情報とともに、次の2つの尺度を用いて、質問紙を構成した。

体験から学ぶ力：中村（2004）が作成した体験学習機能尺度を用いた。この

尺度は、ラボラトリー方式の体験学習が想定している、4つの側面（体験、指摘、分析、仮説化）からなる体験学習の循環過程の各側面について、回答者がどの程度、得意としているかを測定する尺度である。本研究では、各項目について「あてはまる」から「あてはまらない」までの5件法で回答を求めた。

ソーシャルスキル：菊池（1988）が作成したKiSS-18を使用した。KiSS-18は、人間関係を円滑に営む際に有用なスキルを相対的に測定する尺度として広く用いられているものである。本研究では各項目について、「いつもそうだ」から「いつもそうでない」の5件法で回答を求めた。

3. 結果

各開講年の事前事後得点を、測定因子ごとにFigure 1-1から1-5に示す。体験因子とKiSSについては、2018年度と2020年度が上昇し2019年度が下降するという傾向が見られた。仮説化因子についても2018年度と2020年度に類似した変化が見られるが、2020年度については、上昇はごくわずかであった。一方、指摘因子と分析因子については、2019年度と2020年度が類似した変化を示し、いずれも下降していたのに対して、2018年度が上昇傾向を見せていた。

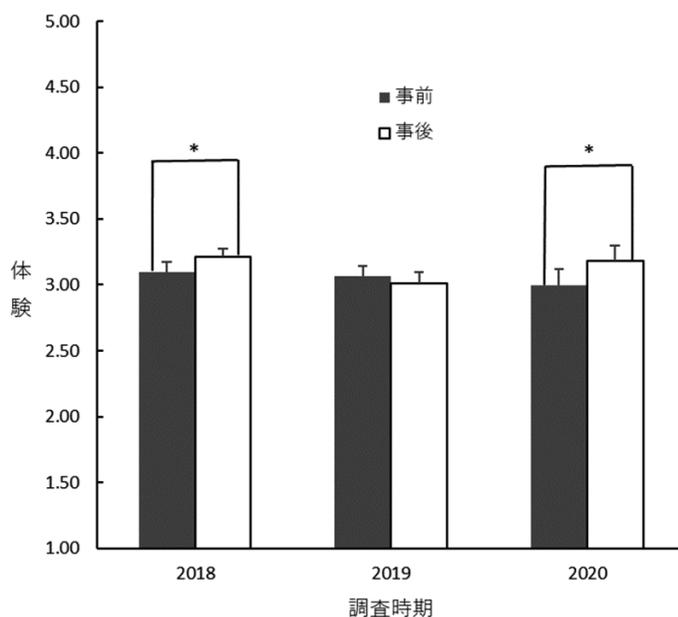


Figure 1-1 体験因子の得点

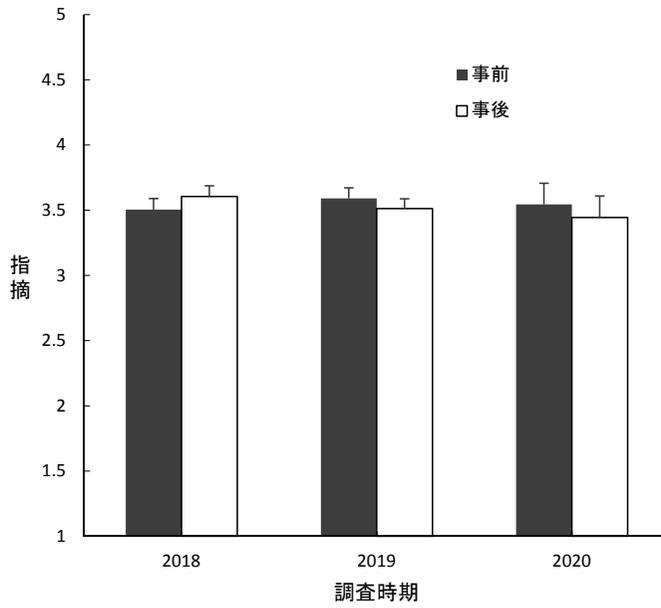


Figure 1-2 指摘因子の得点

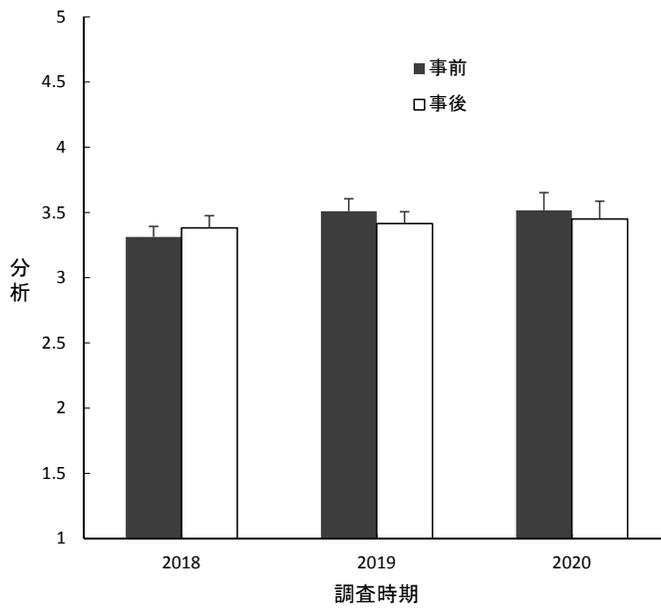


Figure 1-3 分析因子の得点

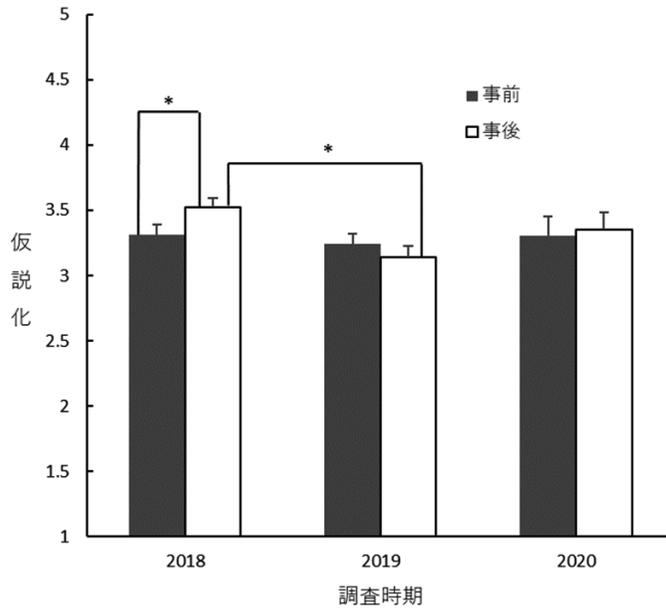


Figure 1-4 仮説化因子の得点

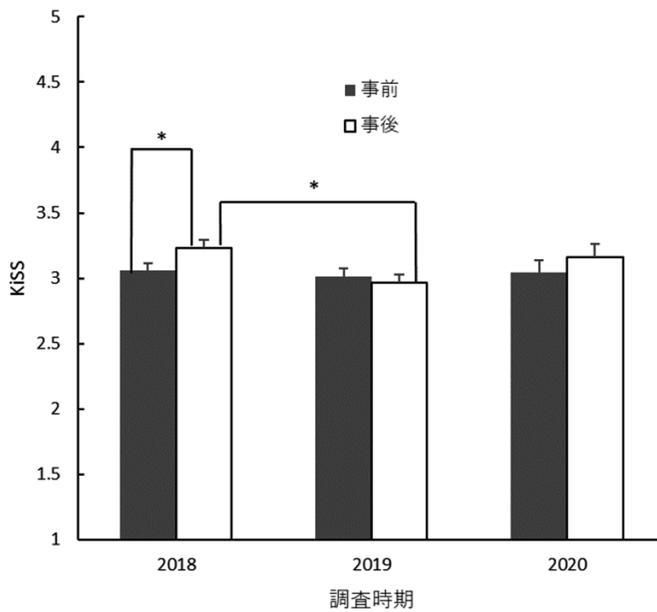


Figure 1-5 Kissの得点

これらの変化を詳細に検討するため、開講年度を被験者間要因、調査時期を被験者内要因する 3×2 の二元配置分散分析を行った。その結果、体験から学

ぶ力のうち体験因子と仮説化因子、およびKiSSの得点について、調査時期と開講年の交互作用が有意であった（体験： $F(2, 202) = 3.415, p = .035$ ；仮説化： $F(2, 202) = 5.157, p = .007$ ；KiSS： $F(2, 202) = 6.821, p < .001$ ）。そこで多重比較を行った結果について、因子ごとに詳しく記す。なお有意水準はいずれも $p < .05$ である。

体験因子については、2018年度（事前： $M = 3.10, SD = 0.69$ ；事後： $M = 3.21, SD = 0.62$ ）および2020年度（事前： $M = 2.99, SD = 0.68$ ；事後： $M = 3.18, SD = 0.65$ ）で、事前得点よりも事後得点のほうが有意に高かった。次に、仮説化因子については、2018年度のみ事前得点（ $M = 3.31, SD = 0.73$ ）より事後得点（ $M = 3.52, SD = 0.68$ ）のほうが有意に高く、また事後得点において2019年度（ $M = 3.14, SD = 0.77$ ）よりも2018年度（ $M = 3.52, SD = 0.68$ ）のほうが有意に高かった。最後にKiSSについても、2018年度のみ事前得点（ $M = 3.06, SD = 0.54$ ）より事後得点（ $M = 3.23, SD = 0.54$ ）のほうが有意に高く、事後得点において2019年度（ $M = 2.96, SD = 0.56$ ）よりも2018年度（ $M = 3.23, SD = 0.54$ ）のほうが有意に高かった。

加えて、体験因子（事前： $M = 3.07, SD = 0.72$ ；事後： $M = 3.12, SD = 0.69$ ）およびKiSS得点（事前： $M = 3.04, SD = 0.54$ ；事後： $M = 3.11, SD = 0.56$ ）について、調査時期の主効果が有意であり、いずれも事前調査と比較して事後調査得点が上昇していた（体験： $F(1, 202) = 4.342, p = .038$ ；KiSS： $F(1, 202) = 6.251, p = .013$ ）。

4. 考察

本稿では、オンライン授業となった2020年度と、対面で行われた2018年度、2019年度の体験学習授業を対象に、体験から学ぶ力とソーシャルスキルの二つの量的指標を用いた比較を行い、オンライン授業によって生じた可能性のある差異を探索することを目的とした。数量データの分析結果に限れば、体験学習の効果という点では年度ごとの差異が顕著であり、オンラインで行われた2020年度に統計的に有意な差として検出可能な特徴的な傾向は見られなかった。

統計的に有意ではなかったものの、指摘因子と分析因子については、事前から事後に向けて減少傾向が見られ、授業の効果が見られなかった可能性がある。しかしこの傾向は2019年度も類似しており、2020年度に特徴的なものではない。体験学習の短期的な効果について池田（2018）は、それまで明確な根拠がないまま「自分はできている」と思っていた学習者が、体験学習を通してEIAHE'のサイクルに基づく詳細な検討を体験することで、自身の持つ力の未熟さに気づいたことが低下の要因ではないかと推測している。すなわち、体験から学ぶ力の向上は体験学習のインパクトとして捉えられるものであり、直接的アウトカムとしては、自らの力に対するクリティカルな気づきが得られることを設定するべきかもしれない。事後での低下傾向が2020年度に限られていなかったこ

とからも、体験から学ぶ力の低下を、体験学習の成果がなかったと解釈すべきなのか、あるいは本来期待されている効果が見られたのか、詳しく検討する必要がある。

同様に、体験因子とソーシャルスキルについては事後に上昇する傾向が見られ、授業のオンライン化が、必ずしも体験学習の授業効果に悪影響を及ぼしてはいないことが示唆される。他方、仮説化因子については、上昇傾向は見られたもののごくわずかであり、他の年度との類似性も乏しかった。本論で取り扱っているデータからは、これがオンライン授業による影響なのか、あるいは年度（受講学年）の特徴なのかは明らかにすることはできない。しかし、オンライン授業による影響であると仮定すると、以下のような可能性が考えられる。

第一に、対面であれば得られたはずの効果が減ってしまった可能性である。仮説化とは、次の人との関わり体験へ向けて、自分がどのような行動をとるかを考えるステップである。対面授業であれば、授業が終了した直後から、それまで授業時間内で関わっていた友人らとの授業外での関わりが始まり、仮説化した行動をすぐに体験を通して実践することができる。しかしオンライン授業では、授業終了後にこうした新たな関わりのお機会を得ることが難しい。さらに本授業が行われていた時期は、政府による緊急事態宣言が発令されていた時期とも重複しており、なお一層、人との関わりのお機会が乏しい時期であった。すなわち、仮説化そのものができたとしても、その仮説の正しさや効果を検証する機会がなかったため、仮説の妥当性に自信を持たず、仮説化因子得点の上昇を阻害した可能性が考えられる。これは、毎回の授業終了時に書かれるジャーナルからも、授業の実習を通して学んだ学びが、オンラインでのコミュニケーション時に注意することというような今年度特有の形態との関係で語られていることとも関連するであろう。つまり、仮説化の項目で答えられている内容が、オンライン上でのコミュニケーションに即したものなのか、それを越えたコミュニケーションに関する事柄に一般化したのかという点は、体験の学びほどの程度抽象化され、学習となるのかという点からも検討が求められるであろう。

これに対して、対面であれば2019年度と同様に事後に低下したはずのものが、オンライン授業によって低下しなかったという可能性も考えられる。これは一見すると、オンラインのほうがポジティブに働いたことを意味するようにも見える。しかし上述したように池田（2018）は、体験学習授業後の体験から学ぶ力の低下はクリティカルな気づきの現れであり、短期的には効果がなかったように見えても、中・長期的視点では体験学習の効果として意味を持つ可能性を述べている。この可能性が正しいならば、仮説化因子が低下しなかったことで、短期的にはオンライン授業のポジティブな成果のように見えても、長い目で見れば体験から学ぶ力の醸成を阻害する可能性があるであろう。

上記の可能性はいずれも本稿で分析したデータのみでは検討不可能であり、仮説の域を出るものではない。しかし、オンライン授業の良悪や効果、意義を

検討するためには、その前提として、体験学習から得られるものは何なのかという問いに対して、中・長期的展望から検討する必要性を提示するものといえよう。

限られたデータのみに基づく検討ではあるが、本研究から、オンラインでのラボラトリー方式の体験学習は、対面と比較して、明確な差異は見出されなかった。しかし、分析したデータが個人の自省に基づく質問紙調査による数値データであるため、実際に学習の成果としての行動変容が生じていたのかを明らかにすることはできていない。同様に数値データの限界から、学習内容が質的に同等であるのかも不明である。加えて本研究では、前提となるプログラムの成果について、本研究で取り上げた指標選択の妥当性や望まれる変化の想定が確定しているといいがたいため、プログラム評価の点でも、2020年度に行われたオンライン授業に効果があったかどうかを判断することもできない。しかし、得られる成果が同質であるとは言えなくとも、少なくともオンラインでのラボラトリー方式の体験学習が明確に劣っているという根拠は見られなかった。

本稿を執筆している2021年2月時点でも新型コロナウイルスの感染拡大は収まっておらず、対面での人と人との関わりが制限され、オンラインという手段での関わりを継続せざるを得ない状況は、続くように思われる。こうした、新たな人間関係の様式も、緊急的手段から日常的手段へと次第に浸透していこう。オンラインでのラボラトリー方式の体験学習実施も、緊急的手段から、新たな可能性の一つとして考慮すべき時になりつつある。オンラインでの人間関係を、副次的なものとして捉えるのではなく、より効果的なオンラインでの関わりのあるようを探る一つの方向性として、オンラインでのラボラトリー方式の体験学習の効果について、さらなる検討を進める意義が高まっていくと思われる。

5. 引用文献

- 池田 満 (2018). 体験を通じた人間関係力を育成するプログラムの評価事例 日本評価学会第19回全国大会Proceedings pp. 41-46.
- 菊池章夫 (2004). KiSS-18 研究ノート 岩手県立大学社会 福祉学部紀要, **6**, 41-51.
- 中村和彦 (2004). EIAHE'モデルの体験学習機能尺度作成の試み アカデミア (南山大学紀要) 人文・社会科学編, **79**, 87-121.
- 中村和彦 (2013). 大学一年春学期におけるラボラトリー方式の体験学習の効果: 体験から学ぶ力の影響 実験社会心理学研究, **52**, 137-151.
- 津村俊充 (2002). ラボラトリー・メソッドによる体験学習の社会的スキル向上に及ぼす効果: 社会的スキル測定尺度Kiss-18を手がかりとして アカデミア 人文・社会科学編, **74**, 291-230.
- 津村俊充 (2010). グループワークトレーニング: ラボラトリー方式の体験学習を用いた人間関係づくり授業実践の試み 教育心理学年報, **49**, 171-179.

Appendix

Appendix 1 2018年度「人間関係概論」授業内容

回数	授業内容
第1回	<p><ねらい></p> <ul style="list-style-type: none"> ●この授業の概要を理解する ●体験学習の一連の流れを体験する ●グループの中での自分のコミュニケーションの特徴に目を向ける <p><実習></p> <p>「ピザパイ」, 「朝刊に間に合わせろ」(カード型の問題解決実習)</p>
第2回	<p><ねらい></p> <ul style="list-style-type: none"> ●ラボラトリー方式の体験学習について理解する(コンテンツとプロセス, 体験学習のEIAHE'のサイクル) ●この授業での「私のねらい(行動目標)」を明確にする <p><実習></p> <p>コーチング・トリオづくり, 実習「出会いの試み」, EIAHE'のサイクルの分析</p> <p><小講義></p> <p>「ラボラトリー方式の体験学習とは」, 「体験学習のEIAHE'のサイクル」</p>
第3回	<p><ねらい></p> <ul style="list-style-type: none"> ●自分のコミュニケーションの特徴(話し方, きき方)に目を向ける ●コミュニケーションのプロセスを観察する視点を持つ <p><実習></p> <p>「はなす・きく・みる」</p>
第4回	<p><ねらい></p> <ul style="list-style-type: none"> ●相手の話をしっかり聴いてみる ●普段の自分の聴き方についてふりかえる ●“コーチング”について理解し, コーチングを通しての他者との関わりを試みる <p><実習></p> <p>「聴く実習」, トリオでコーチング実習</p> <p><小講義></p> <p>「コミュニケーションモデル」, 「コーチングとは」</p>
第5回	<p><ねらい></p> <ul style="list-style-type: none"> ●“グループの中のわたし”の特徴に気づく ●グループで課題(仕事や作業)を行う際に生じるプロセスに気づく <p><実習></p> <p>「ふくぶく村の宝さがし」(カード型の問題解決実習)</p> <p><小講義></p> <p>「グループプロセスの諸要素」, 「フィードバックの留意点」</p>
第6回	<p><ねらい></p> <ul style="list-style-type: none"> ●ふりかえることやフィードバックの意味を理解する ●次の実習に向けて行動目標を明確にする ●この授業での気づきや学びと日常とのつながりを考える <p><実習></p> <p>ジャーナル・ピックアップ, 行動目標のふりかえり, 日常とつなげる</p> <p><小講義></p> <p>「ジョハリの窓」</p>

第7回	<p><ねらい></p> <ul style="list-style-type: none"> ●コンセンサス（全員の合意）によるグループでの意思決定を体験する ●コンセンサスによる話し合いを行う際に生じるグループプロセスに気づき、それに働きかける <p><実習></p> <p>「相談する相手」（コンセンサス実習）</p> <p><小講義></p> <p>「グループでの意思決定」</p>
第8回	<p><ねらい></p> <ul style="list-style-type: none"> ●この授業全体をふりかえる＋締めくくる <p><実習></p> <p>この授業全体をふりかえる, 「私」の変化曲線, 「プレゼント交換」</p>

Appendix 2 2020年度「人間関係概論」授業内容

回数	授業内容
第1回	<p><ねらい></p> <ul style="list-style-type: none"> ●互いに知り合う ●この授業を理解する ●体験学習の一連の流れを体験する <p><実習></p> <p>「ビザバイ」</p> <p><小講義></p> <p>「コンテンツとプロセス」</p>
第2回	<p><ねらい></p> <ul style="list-style-type: none"> ●ラボラトリー方式の体験学習について理解する ●プロセスをふりかえる ●この授業での「私のねらい（行動目標）」を明確にする <p><実習></p> <p>実習「出会いの試み」</p> <p><小講義></p> <p>「ラボラトリー方式の体験学習とは」</p>
第3回	<p><ねらい></p> <ul style="list-style-type: none"> ●自分のコミュニケーションの特徴（話し方、きき方）に目を向ける ●コミュニケーションのプロセスを観察する視点を持つ ●この授業での「私が授業で取り組んでみたいこと」を明確にする <p><実習></p> <p>「はなす・きく・みる」</p> <p><小講義></p> <p>「体験学習のEIAHE'のサイクル」</p>
第4回	<p><ねらい></p> <ul style="list-style-type: none"> ●相手の気持ちによりそう話の聴き方にふれる <p><実習></p> <p>「カウンセリング的な聴き方（傾聴）」</p> <p><小講義></p> <p>「きもちがかよう『聴き方』とは」</p>

第5回	<p><ねらい></p> <ul style="list-style-type: none"> ●“コーチング”について理解し，コーチングを通しての他者との関わりを試みる ●自らの取り組みをふりかえる <p><実習></p> <p>「相手の自己理解を目指した聴き方（コーチング）」</p> <p><小講義></p> <p>「ジョハリの窓」</p>
第6回	<p><ねらい></p> <ul style="list-style-type: none"> ●コンセンサス（全員の合意）によるグループでの意思決定を体験する ●コンセンサスによる話し合いを行う際に生じるグループプロセスに気づき，それに働きかける ●この授業を閉じる <p><実習></p> <p>「相談する相手」（コンセンサス実習）</p> <p><小講義></p> <p>「グループでの意思決定」，「グループプロセスの諸要素」</p>